

〔第15回 学術集会シンポジウム〕

地域社会でまると家族を支援する活動への模索

鈴木 和子

家族支援リサーチセンター湘南

高橋 真理

北里大学看護学部

「地域社会とつながる家族看護実践・教育・研究」という第15回学術集会のメインテーマを受けて、今まさに地域社会で家族をまると支援する活動を展開中の4人のシンポジストに、それぞれの領域での活動の意図や今後の課題についてお話ししていただき、参加者たちが家族看護活動を地域に向けて展開するための大きなヒントと力を得ることを目的としたシンポジウムであった。

最近、格差社会という用語が定着し、わが国で家族に関する事件が多発するようになり、家族をめぐる現実は一層厳しくなっている。そのような家族を取り巻く社会的背景を、時代的、社会的文脈から家族看護の方向性をさぐる必要があるという趣旨で本シンポジウムのテーマが決まったが、このことは、本学会が長年、関心を抱きながらも、なかなか正面から取り上げることのなかった課題でもある。また、家族の著しい変化については、家族規範など社会的規範による抑圧が弱まって、それに代わる確固とした規範も確立されないために、とくに若者たちが拠り所を失っていること、伝統的な家族形態が多様化すると同時に、家族内部の凝集力や解決力が弱まってきていることが主な論点としてあげられている。

そして、家族機能を外から補強する社会的な支援として様々な保健医療制度が創設されているが、実際には、未だ真のニーズに沿っていないという声が高く、混乱期の様相さえ呈している。さらに、それらの公的な制度と家族内の機能を補完するものとしての地域社会のサポート力も、わが国では未だ成熟していないことが問題を複雑化、深刻化している。

このような様々な社会的な複合要因が家族に大きく影響しているが、今回は、「地域社会でまると家族を支援する活動」に果敢に取り組み始めている

先駆者の方々に集まっていたいただき、これらの深刻化している家族に関する社会的な問題にどう取り組んだらよいかという未知の課題に貴重なヒントをいただくことができた。

福井トシ子氏は、低出生体重児や病児の在宅移行前のハネムーンケアやグループサポートケアなど、ご自分の施設で取り組んでいることを画像で紹介。新しい家族の誕生に母子共に在宅生活でスムーズに移行できるよう、個々の家族が求めるケアをシステムに取り入れながら新たに試みている逞しい実例を示していただいた。

標美奈子氏は、なかなか陽の当たらない自閉症児・者と家族が苦しんでいる実態を訴えかけ、それに対する専門職としての生活支援への取り組みを実践的に示すと同時に、教育の現場にありながらも先を見通した活動をするものの意義と模範を示していただいた。

岸恵美子氏には、高齢者虐待予防に関するご自身のこれまでの活動の中から、高齢者と家族を分離するだけではなく、そこから家族を再構築するという大きな課題について、家族看護の視点で力強く述べていただいた。

清田真由美氏は、医師として長年取り組まれてきた更年期の女性を中心とした地域ケアについて、その活動の意図と活動内容について実際の取り組みの経過と課題を具体的に示すことで、今後の家族看護の活動展開に大きなヒントを与えていただいた。

以上の発表の後、フロアからも各シンポジストの取り組みへの質問や意見が述べられ、いずれも地域社会でまると家族を支援するという視点で、今後の家族看護実践活動への大きなインセンティブが得られた貴重なシンポジウムになったと言えるだろう。